北村季吟

近江の三聖人

江戸時代の初めのころ、近江の国（今の滋賀県）に次々と三人の聖人（偉大な先生）が生まれました。

一人は今の高島市に生まれ、陽明学という中国の学問を極めた中江藤樹です。

次の一人は今の高月町に生まれ、朝鮮との外交に尽くした雨森芳洲です。

そしてもう一人が、わたしたちのふるさと野洲市に生まれ、日本の古典（古くからの書物）を極め、和歌や俳句（日本独自の文学）の発展に尽くした北村季吟です

北村季吟画像（季吟文庫）

子どものころ

北村季吟は 1624 年（寛永元年）12 月 11 日、祖父が暮らしていた野洲郡北村（今の野洲市北）に生まれました。子どものころ久助の名前で呼ばれた季吟は生まれて間もなく、父が暮らしていた京都へ移りました。

祖父の北村宗龍も父の北村宗圓も医者だった季吟は、子どものころから医学の勉強に励みました。

しかし、机に向かって勉強ばかりしていたわけではありませんでした。ふるさと北村に帰ったときなどには、祇王井川のまわりに広がる自然の中で虫や魚を追いかけたり、石けりや鬼ごっこを楽しんだりしました。

また、季吟は一緒に遊んだなかまを大切にしました。大人になってからも、北村の人たちに何度も手紙を書き送っているぐらいです。

さらに、季吟は祖父や父がそうであったように、古典や和歌や俳句の勉強にも努力を惜しみませんでした。そのころ、立派な医者になるには、日本や中国の古典などをしっかりと学ぶ必要があったのです。

青年のころ

季吟は医者になるための勉強を続けながらも、古典や和歌や俳句をさらに深く学びたいと考えるようになりました。また、季吟が住んでいた京都には、古典や和歌や俳句を教える先生が何人かいました。

そこで、1639年（寛永16年）15歳のとき、安原貞室の弟子として本格的に和歌や俳句を学ぶようになりました。

その後、1645年（正保２年）21歳のとき、松永貞徳に学び始めました。貞徳はそのころ、古典研究や和歌や俳句の第一人者であり、優れた弟子たちがたくさんいました。

季吟は貞徳に学ぶようになってからは、古典や和歌や俳句の研究にだれよりも努力しました。

その結果、1648年（慶安元年）24歳で、季題（季節を表す言葉）を詳しく説明した『山之井』を書きあらわしました。この書物の中で、季吟はのどかな春の日にのんびりと歩きながら花見をする様子を詠んだ、

「一僕と　ぼくぼくありく　花見かな」

という有名な俳句を残しています。

さらには、1653年（承応２年）29歳のとき、平安時代の古典を研究した成果を『大和物語抄』にまとめました。

和歌や俳句の先生になる

1652年（承応元年）季吟を励まし支えた父の北村宗圓が世を去りました。その翌年の1653年（承応２年）には、季吟を教え導いた松永貞徳が亡くなりました。父と先生を相次いで失った季吟は、心からの深い悲しみを感じました。

しかし、いつまでも悲しんでいたのでは生活ができません。季吟は父のような医者の道を自分で閉ざし、貞徳のように古典や和歌や俳句の先生として生きる道を選びました。

1656年（明暦２年）32歳のとき、季吟が優れた和歌や俳句の先生であることを多くの人たちに証明することになった「俳諧合」が開かれました。

そして、1660年（万治３年）36歳のときには、弟子たちとの協力による俳句集『新続犬筑波集』を作り上げました。この俳句集には、季吟の全国の弟子727人による4,269句が載せられました。季吟は大変たくさんの人々から古典や

和歌や俳句の先生として認められるようになっていました。

古典の研究

1661年（寛文元年）37歳から1687年（貞享4年）63歳にかけて、季吟は古典の研究に努力を積み重ね、次々と古典を分かりやすく説明した書物をあらわしました。

なかでも、1673年（延宝元年）49歳のときにまとめた源氏物語の解説書『湖月抄』全60冊や、その翌年1674年（延宝2年）50歳のときにあらわした枕草子の解説書『枕草子春曙抄』全12冊は、江戸時代の古典研究の最高傑作として、そのころのたくさんの人たちに読まれました。

季吟は生涯にわたって古典の研究を続けました。季吟が書き上げた古典の解説書は、全部で11種類189冊にもなるといわれています。

芭蕉との出会い

季吟は古典の研究がどんなにいそがしくても、和歌や俳句の先生としての仕事を決しておろそかにはしませんでした。たくさんの弟子たちの指導に努力しました。ただ、少しずつ季吟の子の北村湖春や北村正立に弟子たちの指導を任せるようにしました。

1665年（寛文5年）41歳のころからは、伊賀・伊勢（今の三重県）を治めていた藤堂家に招かれて、たびたび俳句の指導におもむきました。そのとき、藤堂家に仕えながら季吟に俳句を学んだのが、後に俳聖といわれるようになった松尾芭蕉でした。

芭蕉は季吟の弟子として熱心に俳句を学びました。芭蕉のまじめな勉強ぶりと優れた才能を見込んだ季吟は、1674年（延宝2年）自分より20歳も若い芭蕉にだけ『埋木』を書き写すことを許しました。この『埋木』は、季吟が書いた特別の文書で、俳句づくりの秘けつが記されていました

季吟に俳句を学んだことが、松尾芭蕉のその後の人生を大きく変えることになったのです。

将軍の先生になる

季吟は1683年（天和3年）59歳のとき、これまでの研究の成果を認められ、

和歌の神様をまつった新玉津嶋神社に移り住みました。

新玉津嶋神社に移ってからも季吟は研究を続けましたが、特に和歌を研究の中心にするようになりました。すでにそのころ、季吟は古典や和歌や俳句の第一人者になっていました。

1689 年（元禄２年）12 月、66 歳になろうとするとき、季吟は江戸（今の東京）へおもむくことになりました。そのころ日本を治めていた江戸幕府の五代将軍徳川綱吉に和歌を教えるためでした。

季吟は将軍に和歌を教えた後、すぐに京都に帰るつもりでした。しかし、将軍は季吟のために屋敷やお金などを用意し、これからも和歌の先生として長く将軍に仕えるように命じました。

その後、季吟は京都にいた家族を江戸の屋敷によびよせ、将軍綱吉や将軍のそばで政治を進めていた柳沢吉保たちに和歌を教えました。そのため、和歌や古典を重んじる京都の文化が江戸の人たちに広がることになりました。和歌の先生としての仕事にいそがしい毎日を送りながらも、季吟は古典や和歌の研究を最後まで続けました。

しかし、1705 年（宝永２年）３月、孫の北村湖元に和歌の先生の仕事を任せると、その年の６月 15 日、81 歳でその生涯を閉じました。

季吟が亡くなった後も、季吟の子孫は、和歌の先生として代々の将軍に仕えました。

ふるさとへの思い

季吟は近江の国から遠く離れたところに住んでいても、自分の生まれたふるさとを大事にしました。江戸で亡くなるまで、北村の人たちに手紙を送り続けました。また、祖父の五十回忌には和歌にそえてお金も送りました。

また、自分の子どもや孫たちに、ふるさとの自然を思いおこすような湖春や湖元という名前をつけました。

当然、季吟の残した俳句や和歌には、ふるさとの人や自然をなつかしんでつくられたものがたくさんあります。

ふるさとの人たちの幸せを願って詠んだ、

「祇王井に　とけてや民も　やすこほり」

という句はその中の代表です。

季吟は 1682 年(天和２年)、58 歳のとき、八幡山に登りましたが、三上山のながめのすばらしさに感動して、

「あふみじ（近江路）は　むら（群）山あれど　其名さへ
　　みかみ（三上）のたけの　しもにたつらし」

という有名な歌を詠みました。

季吟の生涯にわたるふるさとを思う気持ちが、優れた和歌や俳句を生み出したのでした。

季吟の教え

季吟は、季吟の後をついで将軍の和歌の先生になった孫の湖元に次の歌を与えています。

「飛ぶ蛍　窓にあつめて　敷島の
　　道の光を　世々に照らせや」

この歌には、和歌や和歌のもとになる古典の勉強をしっかりと続けて世の中を明るく豊かなものにしなさい、という季吟の教えが込められています。

学ぶことの意味や尊さを説いたこの歌は、季吟のふるさと野洲市に住むわたしたちへの教えでもあるのです。

北村季吟句碑（野洲市北）